

Title	「讓歩」の When と「時」の When
Author(s)	田岡, 育恵
Citation	Osaka Literary Review. 28 P.69-P.79
Issue Date	1989-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25504">https://doi.org/10.18910/25504</a>
DOI	10.18910/25504
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 「譲歩」の *When* と「時」の *When*

田 岡 育 恵

0. Quirk et al. (1985) は、次のような *when* の例を「譲歩」(concessive) の *when* と呼んでいる。

(1) He paid for a seat, when he could have entered free.

(1) の文は「ただで入れたのに、彼は席代を払った」というように、逆接の意味を持っている。しかし、*when* というのは、一義的には「時」の従属接続詞であり、主節で述べられる出来事と *when* 節で述べられる出来事の成立の同時を示すものである。(1) に於いても「ただで入れた時に」というように「時」で解釈する事は考えられる。では、「譲歩」の *when* の解釈は、*when* の一義的な意味である「時」の解釈が与えられた上で、文脈から、付随的に与えられるものだろうか。「時」の *when* と「譲歩」の *when* といった分類は、果たして必要なのだろうか。本稿では、この点について考えたい。

1. Nakajima (1982) の副詞節の分類では、*when* 節はグループIIに属するものとなっている。グループIIの副詞節の特徴というのは、分裂文の焦点の位置に来る事が出来るという事、そして、否定のスコープに入るという事である。Nakajima (1982) の枠組では、これらの点で当て嵌まらない副詞節は、統語構造でグループIIよりも上の節点に付くグループに属する事になる。

例えば、*while* や *since* も、それぞれ「継続」を表す *while* と「対照」を表す *while*、そして、「時」を表す *since* と「理由」を表す *since* というように二つの異なる意味が考えられる。この意味の違いに拠って、*while* 節、

*since* 節は、分裂文の焦点の位置に来られるかどうかという点で、次に示すように異なった振舞いを示す。

(2a) It was while the meeting was being held that the students began to make a riot. (継続)

(2b) \*It is while she resembles her mother that her sister resembles her father. (対照)

(3a) It is since my son was born that we have been living there. (時)

(3b) \*It is since he often tells lies that he is disliked by many persons. (理由)

従って、Nakajima (1982) では、「継続」の *while* と「時」の *since* は、グループIIになり、「対照」の *while* と「理由」の *since* は、グループIIIになっている。

さて、*when* 節は、グループIIという事であるが、果たして、「譲歩」の *when* の場合でも分裂文の焦点の位置に来る事が出来るのだろうか。

(4a) (= (1)) He paid for a seat, when he could have entered free.

(4b) ? It is when he could have entered free that he paid for a seat.

(5a) He threatened to leave when he had no intention of leaving. (小西他編『プログレッシブ英和中辞典』)

(5b) ? It is when he had no intention of leaving that he threatened to leave.

(6a) She cleans the house by herself when she could easily have asked her children to help her. (Quirk et al., 1985, p. 1085)

(6b) ? It is when she could easily have asked her children to help her that she cleans the house by herself.

上の各例で、(a) の譲歩の *when* 節を (b) のように分裂文の焦点の位置に

置くとおかしい。というのは、分裂文の焦点の位置には、その位置に来るものを他の何物でもなく、これなのだと強調する働きがある。しかし、譲歩の *when* の場合は、主節の出来事の起こる時に同時に成立する事態としては、極めて不適切なものが *when* 節に来ている。つまり、 $S_1$  *when*  $S_2$  で、 $S_2$  という、 $S_1$  の示す事態と合わせると不適切な事態が成立している時に  $S_1$  が成立している。 $S_2$  なのに  $S_1$  が成立している」というように、譲歩の読みが生じてくるのだと思われる。例えば、(4a) を (7) と較べてみよう。

(7) He paid for a seat when he should pay for it.

(7) では「席代を払うべきであった時に席代を払った」という事で「払う必要があるのだから払う」というように主節と *when* 節の内容はスムーズにつながっていく。これに対し、(4a) は「払う必要の無い時に払った」という事で、主節と *when* 節の間に逆接の関係が伺える。この逆接性がどうして出て来るかという、「払う必要が無い時は払わない」というのが事態の自然な流れとして推意されるからである。逆に言えば、 $S_1$  の成立に関して  $S_2$  で示される不適切な内容よりもっと適切な内容が *when* 節に来る場合を当然あり得る事として想起出来る。従って、譲歩の *when* 節の内容は、決して主節の出来事が成立する時にあり得る唯一の付帯状況という事にはならない。だから、そのような *when* 節が分裂文の焦点の位置に来るとは考えられないという事になる。

Quirk et al. (1985) は、副詞節を adjunct 節と disjunct 節に分類している。彼等の分類では、「継続」の *while*、「時」の *since* は前者に属し、これに対し、「対照」の *while*、「理由」の *since* は後者に属している。その adjunct と disjunct を区別する基準の中には、分裂文の焦点になれるかどうかという事、そして、否定や疑問の焦点になれるかどうかという事が含まれている。adjunct と違い、disjunct は分裂文、否定、疑問の焦点にはなれない。そして、最初に述べたように Quirk et al. (1985) は、「譲歩」の *when* という用法を認めており、それは disjunct になるとしている。

分裂文の焦点の位置に来られず、否定の焦点になれないのなら Nakajima (1982) の分類基準からすると、「譲歩」の *when* 節は、グループ II ではないという事になる。更に、Quirk et al. (1985) は「譲歩」の *when* は通常、文末に来るとしている。文頭に出現しないという事は、Nakajima (1982) の分類に於いては、グループ IV の特性という事になる。いずれにせよ、「時」の *when* と「譲歩」の *when* とでは、統語的振舞いが違うようである。<sup>1)</sup>

2. 本章では、更に「時」の *when* と「譲歩」の *when* の違いを考えていく。

荒木 (1986) に拠ると、*when* 節は、次のように時を示す副詞と共に起する事は出来ない。

(8) \*At ten o'clock, John arrived when Harry left.

これは *when* 節で時の限定が行なわれるのに、更に別の要素で時の限定を行なう事から来るおかしさだろうと思われる。同一文中に述べられる出来事の時の指定が複数あると、矛盾を来す、或いは、剩余的となるのだろう。

そこで、もし「譲歩」の *when* と解釈される場合に同一文中に時を表す副詞が出現出来るとすれば、その *when* 節は、最早、時を限定する働きはしないと言えるのではないか。そして、次の例で「譲歩」の *when* は「時」の副詞 *today* と共に起している。

(9) I've already wasted time *today* going down to the station when Mrs. Hudd meant to go herself. — 僕は今日、ハッド夫人が自分で行く積りでいたのに駅まで行って時間を無駄にしてしまった。  
— (Christie, A., *They Do It With Mirrors*. Fontana. p. 35)

更に「譲歩」の *when* が「時」の *when* と異なると思われる点を指摘しよう。

Larson (1987) は、*when* 節の場合、例えば、(10) では、(11a, b) の各々の *when* 節の基底表示に対応する二つの読みが可能であると指摘する。

(10) I saw Mary in New York when she claimed she would arrive.

(11a) [<sub>S1</sub> when [she claimed [<sub>S2</sub> she would arrive] t] ]

(11b) [<sub>S1</sub> when [she claimed [<sub>S2</sub> she would arrive t] ] ]

つまり、(10)には、(11a)に対応する「私がメアリーとニューヨークで会ったのは、彼女が到着するという事を発言した時であった」という読みと、(11b)に対応する「私がメアリーとニューヨークで会ったのは、彼女が到着時刻として知らせていた時刻であった」という読みがある。Larson(1987)は、これに対して、(12)のような *although* 節の場合、*claim* の埋め込み文に *although* が、直接、関係する読みはないと述べている。

(12) I still respect John although he claims that he killed his mother.

(12) に於いては「ジョンが自分は母親を殺したのだと言っているにも拘らず」という解釈のみであって「彼が母親を殺したにも拘らず」という解釈はない。

次の(13b), (14b)は、各々「譲歩」の *when* の用例である(13a), (14a)の *when* 節内に別の節を割り込ませたものである。

(13a) They were gossiping when they should have been working.  
(Quirk et al., 1985, p. 1085)

(13b) They were gossiping when the boss claimed they should have been working.

(14a) How can he get high grades when he cuts classes so often?  
(小西他編『プログレッシブ英和中辞典』)

(14b) How can he get high grades when people say that he cuts classes so often?

(13b) では、「彼等が噂話をしていたのは、上司が仕事をすべきであったという発言をした時であった」という解釈と並んで、「彼等が噂話をしていた

のは、上司が彼等が働いているべき時間として要求している時間帯であった」という解釈が考えられる。(14b)に関しては、「彼は、人々がこれこれの事を言う時に良い成績を取る」というよりも「噂に拠れば、彼はよく授業をサボっているような時に良い成績を取る」という解釈になるだろう。このように *when* は、*although* とは異なり、*when* 節中の埋め込み文に関係するという事はある。それは Larson (1987) が指摘する通りであるが、そのような *when* は、あくまで「時」の *when* であって、「譲歩」の *when* ではないのではないか。「譲歩」と解釈される場合は、*although* の場合と同様に副詞節内の埋め込み文に直接、関係する事はないのではないだろうか。

上の (14b) で「人々がこれこれの事を言う時に良い成績を取る」と解釈する事は、*when* を主節と副詞節の二つの出来事の同時成立を表すものとして解釈する限りに於いては考え難い。しかし、そのように *when* が時間的に同時に成立する事を表すのではなく、*when* 節で述べられるような事態が成立する場合に主節で示されるような事態が成立するというように、「場合」を表すものと考えれば、その解釈は全く自然に受け取る事が出来るよう。

Declerck (1988) は、「時」を表すのではない *when* 節を考察している。例えば、(15) のような *when* 節は「時」ではなく、主節の陳述が真であるとされる「事情」(case) を制限するものであるとしている。

(15) People are orphans when their parents are not alive.

「譲歩」の *when* とされる用例の中には、そのように「時」としての解釈が難しい場合がある。次のような場合がそうである。

(16a) How can you even think that, when I have already proven that point of view wrong? (Declerck, 1988)

(16b) Haven't I reason to go out of my senses, when I see things going at sixes and sevens? (ibid.)

(16c) Whom should I invite, when you refuse to come? (小西他編『プログレッシブ英和中辞典』)

(16a)の *when* 節内は、現在完了になっているが、現在完了の文とはある特定の時点に起こった事態を示すものではない。従って、この *when* 節は特定の時を示すものとは考えられない。(16b)の *when* 節は、現在完了ではないが、*at sixes and sevens* という副詞があり、やはり、特定の時に限られた事態ではない。先程の (14a) でも、*when* 節内に *so often* という頻度の副詞が見られる。頻度の副詞が出現するという事は、その副詞が修飾する出来事は特定の時に於いてのみ起こる事ではないという事になる。(16c)でも、*when* 節の「あなたが来る事を拒む事」と主節の「私が誰かを招待する事」が同時成立の事態として結び付けられているとは解釈しがたい。このように考えていくと、「譲歩」の *when* は「時」の *when* とは異なるものとして扱った方が望ましいように思われる。

最後に、「譲歩」の *when* だからこそ見られると思われる現象を挙げておこう。「譲歩」の *when* は、(14a) や (16a-c) のような疑問文、しかも修辭疑問文と解釈され、問われる事態の否認を要求する文の中に現われる事が多い。König (1986) は、*if* 節について、疑問文中に出現する時は譲歩条件節として解釈される傾向があると指摘し、その理由を次のように述べている。話し手、聞き手共に前件 *p* と後件 *q* で表される出来事の間関係について通常認められる確信がある。その確信に基づいて、もし *p* が *q* の成立に適した条件であるのならば、敢えて *q if p?* と問う事は意味がない。これに対し、*q* の成立にとって寧ろ不適切な条件を *p* が表すのなら、*q if p?* は意味のある問いとなるだろう。従って、疑問文中に出現する *if* 節は譲歩の解釈を受けやすいという。尤も、(17) の *if* 節に関しても、そのように「譲歩」と解釈される可能性もあれば、他方、単なる「仮定」と解釈される可能性もあるのだから、疑問文中の *if* 節を全て譲歩とみなす事は出来ない。



(17) Will John go if Peter comes?

同様に、疑問文中の全ての *when* 節が譲歩と解釈されるわけではないが、主節が修辞疑問文に解釈されるというのも、主節と *when* 節の示す事態のつながりに意外性があるからであり、主節と *when* 節のスムーズな、順接的つながりの否認、即ち、意外性の確認がされるのだという事は十分に考えられる。

3. 前章の最後で、*if* 節も譲歩を表す事に触れた。では、*if* を用いた譲歩節、そして、*though* を用いた譲歩節と *when* を用いた譲歩節とでは、どこが違うのだろうか。この章では、その点について考えたい。

Haiman (1974) に拠ると、習慣的、又は反復される出来事の場合、*when* は全く構わないのだが、*if* はおかしく、*though* は不可だという。

(18a) Even  $\left\{ \begin{array}{l} \text{when} \\ ? \text{ if} \\ * \text{ though} \end{array} \right\}$  it rained the show invariably went on.

(18b) Even  $\left\{ \begin{array}{l} \text{when} \\ ? \text{ if} \\ * \text{ though} \end{array} \right\}$  it is raining, I am seldom cold.

(18c) Even  $\left\{ \begin{array}{l} \text{when} \\ ? \text{ if} \\ * \text{ though} \end{array} \right\}$  it had rained, the ground was never slippery.

何故、このような場合、*though* や *if* が使われないのだろうか。習慣的、又は反復される事態というのは、即ち、頻度の高い事である。(18a) なら、「雨が降ってもショーは常に続行された」という事だが、*though* の逆接で結び付けられる二つの事態は両方の出来事の共存が意外であるという話者の判断の下に示されている筈である。しかし、その二つの事態が *invar-*

*iably* で修飾される程、諸中、起こる事であるのなら、それらの共存は意外でも何でも無い事になり、矛盾を来すのだらうと思われる。

Quirk et al. (1985) は、*although, though* は状況の似た節を関連づける事が出来るとして (19) を挙げている。

- (19) Although Sam had told the children a bedtime story, June told them one too (anyway).

Quirk et al. (1985) は、これに対し、譲歩の *when* の場合は、示される状況の相反が要求されるとしている。その例が、(6a), (13a) であり、下に繰り返し挙げておく。

- (20a) They were gossiping, when they should have been working.  
 (20b) She cleans the house by herself, when she could easily have asked her children to help her.

これは、*though* にはその語自体に逆接の意味があるが、*when* にはそれがないという事に起因するものだろう。*though* の場合は、結びつけられる二つの節は、その内容からすれば対比されるようなものではないにしろ、その間の逆接性は *though* が保証する。これに対して、*when* の場合は、たとえ、譲歩の意味になる時でも、*when* 自体には逆接の意味はないから、結びつけられる二つの節の対比性、逆接性はそれらの節の内容から来なければならないという事になるのだろう。

(18a-c) の *though* が不可であるというのは、二つの節が *though* に拠って話者の責任に於いて、逆接で結びつけられる事がこの場合おかしいという事だろう。では、(18a-c) の *if* は何故おかしいのだろうか。

Declerck (1988) は、(21a, b) を較べ、*when* 節には譲歩の含みがあるが、*if* 節にはその含みはないとしている。

- (21a) Often students come to me when they should really go to their tutors.

- (21b) ?? Often students come to me if they should really go to their tutors.

しかし、先に述べたように *if* 節も譲歩の読みになる事はある。寧ろ、(21b) のおかしきは *often* という副詞の存在から頻度が文に関係しているという事から来ているように思われる。König (1986) は、譲歩条件文では後件は常に成り立つ。即ち、含意されるのだと述べている。そのような場合に頻度が介入してくる事は矛盾を来すのではないだろうか。

これに対し、*when* の場合、主節と副詞節に理屈の上ではどんな内容のものが来てもよいと言えるのではないだろうか。その事を典型的に示しているのが、次のような *when* の用例である。

- (22) He was actually in the act of typing a letter when he was shot. (Christie, A., *They Do It With Mirrors*. Fontana. p. 90)

(22) のような例では、主節の出来事の進行中にその出来事を不意に止めてしまうような出来事が *when* 節で示されている。「タイプを打つ事」と「射殺される事」という、およそ、縁のない二つの事態が、たまたま、同時に起こったというだけで、*when* に拠って結びつけられているのである。このように、*when* は、*though* や *if* のように二つの事態の逆接関係や因果関係を話者がその責任に於いて表現するというのではなく、単に二つの事態の同時成立を示すに過ぎないと言える場合がある。従って、*when* の場合、*if* や *though* よりも自由に二つの事態が結びつくと考えられる。そして、その二つの事態に対照性が強く伺えれば、「譲歩」の *when* という事になるのだろう。

#### 4. 結び

以上、「譲歩」の *when* は、「時」の *when* といくつかの点で違いを示すという事を示した。しかし、他の譲歩の従属接属接続詞と較べると、本来は「時」の従属接続詞という性格が出ているようである。

## 注

- 1) しかし、分裂文や否定の焦点に来られるかどうかという事が、Nakajima (1982) の主張するように副詞節の統語構造上の位置の違いに反映されるべきかどうかは疑問であると断っておきたい。

## 参考文献

- 荒木一雄編 (1986) 『英語正誤辞典』 研究社出版。
- Declerck, R. (1988) "Restrictive *WHEN*-Clauses" in *Linguistics and Philosophy* 11; pp. 131-168.
- Haiman, J. (1974) "Concessives, Conditionals, and Verbs of Volition" in *Foundations of Language* 11; pp. 341-359.
- König, E. (1986) "Conditionals, Concessive conditionals and Concessives: Areas of Contrast, Overlap and Neutralization" in Traugott, E. (eds.) *On Conditionals*. Cambridge: Cambridge University Press; pp. 229-246.
- 小西友七・安井 稔・國広哲弥 (1987) 『プログレッシブ英和中辞典』 第2版 小学館。
- Larson, R. (1987) "Extraction and Multiple Selection in PP" in *MIT Working Papers in Linguistics*.
- Nakajima, H. (1982) "The V<sup>4</sup> System and Bounding Category" in *Linguistic Analysis* 9. 4; pp. 341-378.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.